様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３４５３６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２２５８

研究課題名（和文）終末期にある療養者のための食事ガイドラインの開発

研究課題名（英文）Development of dietary guidelines for patient in the terminal phase of the disease

研究代表者
関戸　啓子（Sekido, Keiko）

宝塚医療大学・和歌山保健医療学部・教授

研究者番号：９０２２６６４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、終末期にある療養者のための食事ガイドラインの開発を目的とする。文献検討、聞き取り調査などにより「終末期にある療養者のための食事ガイドライン」を作成した。ガイドラインは、1)食事をどのようにとらえているかという「療養者が抱く食事の意味」「介護者が抱く食事の意味」の項目と、2)身体状況と介護力にあった食事を選択するための「療養者の摂食・嚥下機能」「介護者の介護負担状況」の項目と、3)医療介護の専門職による支援がどの程度得られるかという「医療の専門職の支援状況」「介護の専門職の支援状況」の項目にわけて、その内容によって適切な食事へ導けるように構成して作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の目的は、終末期にある療養者のための食事ガイドラインを開発することである。 在宅において積極的な治療を望まず、患者というよりも、療養者として終末期をおだやかにすごしたいという希望から、治療方法のひとつである中心静脈栄養や経管栄養を望まない人もいる。終末期のQOLの視点からも、口からの食事を望む声は大きいと思われる。しかし、栄養状態を良くする目的ではなく、最期のときを充実させるための食事に関するガイドラインは、これまで考えられてこなかった。在宅で最期の時をすごす療養者が増える我が国において、本ガイドラインの意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop dietary guidelines for patient in the terminal phase of the disease. A "dietary guideline for patient in the terminal phase of the disease" was prepared based on literature reviews and interview surveys. The guidelines consist of the following items. 1) How the patient perceives the meal, and 2) Select the meal that matches the patient's physical condition and the caregiver's ability. 3) the degree of support provided by medical professionals, and the extent to which professional support can be obtained. Each item was configured and created so that it could lead to appropriate meals.

研究分野：看護学

キーワード：終末期　療養者　食事

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1950 年時点で 5%に満たなかった高齢化率（65 歳以上人口割合）は、1985（昭和 60）年には 10.3%、2005（平成 17）年には 20.2%と急速に上昇し、2015（平成 27）年は 26.7%となっている。将来（出生中位・死亡中位推計）においても、2060 年まで一貫して高齢化率は上昇していくことが見込まれており、2060 年時点では約 2.5 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となる見込みである（平成 28 年版厚生労働白書）。さらに、我が国においては、団塊の世代が後期高齢者となる 2025 年が目前にせまってきている。これ以降、多くの高齢者が在宅で最期のときをすごすようになることが予測されている。在宅療養における介護負担の大きさは社会問題ともなっている。在宅で、積極的な治療を望まない場合、そこでは生活の援助者として、介護者が関わることになる。特に、医療処置を望まない場合は、中心静脈栄養や経管栄養をしていないため、介護者は日々の食事をどうして良いのか悩むが、終末期の療養者に対する食事はどうあるべきか示した指針は見当たらない。終末期にある療養者のための食事ガイドラインの作成は現在の日本に求められる緊急の課題である。

２．研究の目的

本研究の目的は、終末期にある療養者のための食事ガイドラインを開発することである。

栄養状態を良くする目的ではなく、最期のときを充実させるための食事に関するガイドラインは、これまで考えられてこなかった。しかし、事例の発表や現場の工夫についての先行文献は存在する。それらに加えて、知見を持ち寄り、現場の専門家の意見を取り入れ、現状や関連要因を集積することで、ガイドライン作成を試みる。医療ではなく、療養者の生活という視点で、現状に即した、有用性の高い終末期にある療養者のための食事ガイドラインを作成するものである。

３．研究の方法

終末期にある療養者・患者・介護者に関する看護学の研究者と、在宅における栄養の研究者および統計学の研究者が、各研究分野の先行文献と知見、必要に応じて研究フィールドにおける聞き取りおよびアンケート調査から、「終末期にある療養者のための食事ガイドライン」を作成する。

４．研究成果

１）終末期にある療養者の食事の実態と意味に関する検討

終末期のがん患者とその家族が書いた 8 冊の闘病記を対象に、食事に関する文章を抜き出し、テキストマイニングの手法を用いて分析した。クラスター分析の結果、闘病記の食事に関する記述内容は 5 つのクラスターに類型化された。「食べられる食事形態」「口から食べることは生きること」「最期の希望」「食べる喜び」「食べられることへの感謝」と解釈した。闘病記を分析した結果、終末期のがん患者は、口から食べられることに希望を見出し、嚥下困難や疼痛があっても、何とか口から食べることのできる食事形態を模索していることがわかった。また、食べることができる一日一日に感謝し、最期に残された喜びともなっていた。食は生きている実感をもたらし、生きる希望をつなぐ役割を持っていることが示唆された。終末期にあるがん患者にとって、食事は重要な意味を持っていることが明らかとなった。さらに、緩和ケアを受ける患者の食事に関連した事例研究の抄録を、テキストマイニングの手法を用いて分析することによって、食事の実態と意味を検討した。クラスター分析の結果、緩和ケアを受ける患者の食事に関する記述内容は 5 つのクラスターに類型化された。「食事に対するチームアプローチの重要性」「状態に合わせた食事の提供」「患者・家族にとっての食事の重要性」「食べることは希望」「家で食事できる意味」と解釈した。住み慣れた場所で、患者を含めた家族で食事することが生きる希望につながっていると思われた。

２）療養者が求める食事

がん患者に対して、どのような食生活支援がなされているのか明らかに することを目的に文献の検討を行った。テキストマイニングの手法を用いて、クラスター分析を行った結果、研究内容は、「がん患者への食事の工夫」「終末期にあるがん患者の食事」「がん患者のサルコペニアと食事の関連」「がん患者の食事摂取量の実態」「栄養サポートチームによる介入の効果」に分類された。研究内容は「がん患者への食事の工夫」が最も多く、工夫によって患者の食事摂取量が増えたという結果が報告されていた。どの報告も、見た目が美しく、味がおいしいと感じられ、食べる気分になる食事を目指して工夫を重ねていた。日本の伝統的な食事や味付けを生かす工夫も多く、食べなれた味が大切にされていた。また、季節が感じられる食事や祭りなど行事に伴う食事も提案されていた。食事が栄養状態の改善だけではなく、生きる楽しみを提供し、生活の質の向上にも貢献していることが示唆された。

３）終末期にある療養者の食事援助に関する文献検討（日本と海外）

（1）日本の場合

終末期における食事援助に関する日本の論文を調査した。テキストマイニングの手法を用いて、クラスター分析を行った結果、調査した論文の内容は、「食事介助の工夫に関する事例研究」、「介護者の食事介助の負担に関する研究」、「訪問看護による食事介助の負担に関する研究」に分類された。これらの分類のうち、調査内容の最も多くを占めるのは「食事介助の工夫に関する事例研究」であり、食事介助を工夫することにより終末期にある療養者の食事摂取量が改善したことが報告されていた。

（2）海外の場合

国際的な英語文献を対象に、終末期にある患者の食事援助に関して文献検討を行った。テキストマイニングの手法を用いて、クラスター分析を行った結果、「終末期にある患者の栄養状態の向上または維持を目的とした介入研究」「食事と嚥下障害の程度との関連に関する研究」「食事と化学療法の時期との関連に関する研究」「終末期にある患者の食事援助に対する介護者の負担に関する研究」「終末期にある患者の食事に対する本人または家族の経験に関する研究」に分類された。「終末期にある患者の栄養状態の向上または維持を目的とした介入研究」が最も多く、食事の選び方、食事の内容、食事の間隔など、さまざまな工夫が提案され、実施した結果が報告されていた。各国とも、終末期の患者が少しでも食欲を増すことはできないか、栄養状態を維持・改善することはできないかという目的で、方法を模索していることが明らかになった。

4） 終末期にある療養者の栄養管理に関する文献検討

終末期にある療養者の栄養管理に関して文献検討を行った。テキストマイニングの手法を用いて、クラスター分析を行った結果、4つのクラスターに類型化された。「終末期の希望を維持する食事援助の経験」「入院時における経口摂取継続を維持するための検討」「がん患者の食事と看取りに関するケア」「高齢者施設における緩和ケアと食事」と解釈した。食事が患者の希望をつなぐことができた援助経験が報告されていた。また、病院においてもなるべく経口摂取が維持できるような援助が検討され、がん患者の看取りにおいて食事に関するケアが重視されていることもわかった。高齢者施設においても、緩和ケアを行う中で食事のあり方が検討されていた。終末期の療養者に対する栄養管理は、口から食べられることを重視し、支援方法が経験に基づいて模索されていることがわかった。

以上の文献検討の内容、研究者の専門的な経験や知見、研究フィールドにおける聞き取りによる結果を持ち寄り、研究者間で検討を重ね「終末期にある療養者のための食事ガイドライン（案）」を作成した。この（案）を関連の研修会の場や研究フィールドにおいて説明し、意見を聴取したところ、家族の状況を吟味する項目が欠けていることがわかった。さらに、口腔ケアに関する学会に参加したところ、口から食べることの支援に関して看護師以外の専門職が多くかかわるようになっているとの意見があり、再検討を行った。

5）終末期にある療養者の食事援助と家族に関する文献検討

終末期にある療養者の食事援助と家族に関する文献検討を行った。テキストマイニングの手法を用いて、クラスター分析を行った結果、4つに類型化され、「最期まで経口摂取を維持する生活は家族にとっての希望となる」「食事の支援方法は患者・家族の意思を尊重する」「自宅で可能な食事を考えることが必要」「患者の思いに寄り添った食のケアが必要」と解釈した。患者が最期まで口から食事するという、医療に依存しない食事方法は、患者だけではなく、家族にとっても希望につながっていた。患者の思いに寄り添い、かつ家族が自宅でできる方法を検討支援することの必要性が示唆された。

6）終末期にある療養者が口から食べることを支援する人たちに関する文献検討

ターミナルケアにかかわる人たちがどのように口から食べることを支援しているのか知るために、口から食べることの支援に関する研究を分析した。テキストマイニングの手法を用いて、クラスター分析を行った結果、4つのクラスターに類型化された。内容を吟味した結果、「口腔ケアによって患者の経口摂取を支える」「リハビリテーションによって食べる機能を支える」「歯科医療によって摂食嚥下を支える」「栄養ケアの実践によって経口摂取を支える」と解釈した。口から食べることは、看護師、リハビリテーションの専門職、歯科関係の専門職、栄養士と、摂食に関する専門職が各々の専門性を生かして支援しており、その効果も検証されつつあることがわかった。口から食べることを専門職がチームで支援している取り組みは近年になって報告されている傾向があり、チームによる支援の広がりがみてとれる。しかし、在宅においては病院と比べて多職種連携の難しさがあるためか、まだ病院における取り組みが主流であった。今後は、在宅におけるチームアプローチの取り組みが増えと予測される。

この分析結果をアンケートに反映して、再検討を行い、「終末期にある療養者のための食事ガイドライン（案）」を修正した。修正した「終末期にある療養者のための食事ガイドライン（案）」について、意見や助言を求めるアンケートを実施するために、プレテストを行った。その段階で、ほとんどが自由記述になるため、聞き取り調査の方が回答しやすいとの意見が多く、聞き取り調

査も併用した。この結果をもとに「終末期にある療養者のための食事ガイドライン」を作成した。ガイドラインは、食事をどのようにとらえているかという「療養者が抱く食事の意味」「介護者が抱く食事の意味」の項目と、身体状況と介護力にあった食事を選択するための「療養者の摂食・嚥下機能」「介護者の介護負担状況」の項目と、医療介護の専門職による支援がどの程度得られるかという「医療の専門職の支援状況」「介護の専門職の支援状況」の項目にわけて、その内容によって適切な食事へ導けるように構成して作成した。今回は時期的にコロナ禍であり、当事者（介護者および療養者）を訪問して意見をもらうことはできなかった。今後は、このガイドラインを当事者に直接示し、使いやすさ、理解のしやすさなどについて意見をもらい、修正・改善を加える予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Hiroto Sekido, Keiko Sekido, Kiyomi Harada, Sayoko Uemura, Kaori Tsutsumi, Hitomi Takeichi
２．発表標題 Status and real meaning of diet for terminal stage cancer patients in Japan: Analysis of written records of patients' battle against disease
３．学会等名 MASCC/ISOO 2019 Annual Meeting on Supportive Care in Cancer（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko Sekido, Hiroto Sekido, Kiyomi Harada, Kaori Tsutsumi, Sayoko Uemura, Hitomi Takeichi
２．発表標題 Content analysis of abstracts related to meals of patients receiving palliative care : using text mining techniques
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Keiko Sekido, Kiyomi Harada, Kaori Tsutsumi, Sayoko Uemura, Hitomi Takeichi, Hiroto Sekido
２．発表標題 A literature review on support for eating habits of patients with cancer in Japan
３．学会等名 MASCC/ISOO 2018 Annual Meeting on Supportive Care in Cancer（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiroto Sekido, Keiko Sekido, Kiyomi Harada, Sayoko Uemura, Kaori Tsutsumi, Hitomi Takeichi
２．発表標題 Status and real meaning of diet for terminal stage cancer patients in Japan: Analysis of written records of patients' battle against disease
３．学会等名 MASCC/ISOO 2019 Annual Meeting on Supportive Care in Cancer（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	竹市　仁美 (Takeichi Hitomi) (00469272)	神戸女子大学・家政学部・教授 (34511)	
研究分担者	植村　小夜子 (Uemura Sayoko) (10342148)	佛教大学・保健医療技術学部・教授 (34314)	
研究分担者	堤　かおり (Tsutsumi Kaori) (20327480)	宝塚医療大学・和歌山保健医療学部・教授 (34536)	
研究分担者	關戸　啓人 (Sekido Hiroto) (40718235)	大阪成蹊大学・教育学部・講師 (34437)	
研究分担者	原田　清美 (Harada Kiyomi) (80712934)	京都府立医科大学・医学部・准教授 (24303)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関